

2023（令和5）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2024（令和6）年4月16日

代表者 石井 弓

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文) 戦争記憶の国際的比較研究 英文) International Comparative Studies on War Memories			
研究期間	2023（令和5）年度 ～ 2026（令和8）年度（4年間）			
研究領域	（E）紛争と共生をめぐる歴史と政治 [以上から最も近い領域の一つを選び、他を削除]			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	石井弓	東北大学・准教授	中国地域研究、オーラルヒストリー	研究代表者
	今井昭夫	東京外国語大学・名誉教授	ベトナム地域研究、東南アジア近現代史	研究分担者
	越野剛	慶應義塾大学・准教授	ロシア文学、ロシア文化史	研究分担者
	田村容子	北海道大学・教授	中国演劇、中国文学	研究分担者
	村本邦子	立命館大学・教授	臨床心理学、コミュニケーション心理学	研究分担者
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額]		
	外部資金(科研・民間等)	なし		[小計]
	合計金額	300,000 円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)	<p>本研究の目的は、ロシアとウクライナを含む、アジアでの戦争や紛争の記憶を比較し、戦争記憶（災厄の記憶を含む）の世代間継承と社会や歴史の関係について明らかにすることである。その際、歴史学や文学といった文化論的研究と、精神分析や心理学といった人間の内面を論じる研究が協働することで、新しい方法論を探究する。将来的には国際的な戦争記憶研究のプラットフォームを形成し、ロシアのウクライナ侵攻以来、対立や分断が進む世界の動きの中で、アカデミズムが何をなせるか思考する場としていきたい。</p> <p>今年度は3回の研究会と、ワークショップを開催した。研究会の内容は、第1回（9月20日）「戦争記憶研究における心理学の可能性」（石井弓）、第2回（11月13日）「ソ連における戦争犯罪の記憶とポスト・メモリー」（越野剛）、第3回（2024年1月20日）「ベトナム戦争のオーラルヒストリー」（今井昭夫）であり、中国、ロシア、ベトナム、日本などアジア各国を研究対象とする研究者による議論を行った。ワークショップは「戦争記憶研究の新展開を探る」をテーマとし、2024年3月4日、5日の二日間にわたって公開で行い、1日目は「戦争記憶の新展開を探る」と題して方法論に関する議論を行った。二日目には「映画『鬼が来た』から読み解く戦争記憶」（田村容子）、「台湾高地先住民集落での植民地戦争の記憶」（中村平）による発表と議論を行った。本年度は共同研究の開始年度として、アジア各国・地域の戦争記憶研究について知見を広めることが目指され、その中で国際比較によって各研究内容が相対化される効果がみられた。また方法論の探究として、戦争記憶に関する研究手法の変化を概観し、心理学的な観点から、記憶のメカニズムに分け入っ</p>			

	た分析的視点が提示されたことは、新しい研究手法を開拓する糸口となった。来年度は中村平氏にも参加してもらい、台湾の植民主義暴力とオートエスノグラフィーの観点を取り入れていく予定である。		
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	ロシア、日本、中国、ベトナムといったアジア全体にまたがる問題系として、戦争の記憶を提示したこと、またその方法論として、文学、歴史学、政治学に、心理学を融合した、学際的な研究手法を模索したことは、初歩の段階ではあるが、ロシア・ウクライナ戦争以来顕著になりつつあるグローバル世界の対立構図を解きほぐす知的な実践となった。3月に行ったワークショップでは一般の参加者もあり、学外にもアピールすることができた。		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など： 4回	国際会議： 回	
	研究組織外参加者（都合）： 30人	研究組織外参加者（都合）： 人	
研究成果	学会発表（ ）本	論文数（ ）本	図書（ ）冊
専門分野での意義	[専門分野名]	[内容]	
学際性の有無	[有]	参加した専門分野数：[6] 分野名称[ロシア文学、ロシア・ウクライナ地域史論、中国史、中国文学、中国演劇、ベトナム近現代史、オーラルヒストリー、臨床心理学、コミュニティ心理学、台湾植民地研究]	
文理連携性の有無	[有]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有/無]	[内容]	
国際連携	連携機関数：	連携機関名：	
国内連携	連携機関数： 6	連携機関名：北海道大学、東北大学、東京外国語大学、慶應義塾大学、立命館大学、広島大学	
学内連携	連携機関数：1	連携機関名：東ユーラシアプロジェクト（ワークショップを共催）	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数： 5	参加学生・ポスドクの所属：東京大学、京都大学、その他	
第三者による評価・受賞・報道など			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	今年度は、共同研究の開始年として、各参加者の研究内容を知り、今後の協働可能性や研究の展開を見通していく段階にあった。その成果は上述の通り、国際比較による各研究の相対化、学際的共同研究による新しい方法論の模索の2点において顕著であった。ただし、共同研究は緒に就いたばかりであるため、その真価は今後の研究交流の中で明確になると考えている。今後の課題として韓国・朝鮮を対象とする研究者の参加、アジアの他国の研究者の参加が挙げられる。また、日本国内を対象とする戦争記憶の研究と日本が侵略した国や地域を対象とした研究をどう関連付けていくのか、その中で「和解」という問題をいかに取り上げていくのかも、議論を深める必要がある。また、方法論についても、これまでの変化を確認し新しい協働の可能性を見出した段階にあり、議論を通してそれを深め鍛え上げるプロセスを、今後は踏んでいくことになる。その上でアジアを跨ぐ戦争記憶研究を日本国内に留めずに国際的な場で発表し広げていくことを目指していきたい。		
最終年度	該当 [無]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

[学会発表]

石井弓、今井昭夫、越野剛、田村容子、村本邦子、中村平「ワークショップ 戦争記憶研究の新展開を探る」2024年3月4日、5日（東北大学）

越野剛「ソ連における原爆文学の受容とSFにおける原爆表象」日本比較文学会全国大会シンポジウム「原爆表象の受容と記憶の継承—冷戦期の東ヨーロッパを中心に」2023年6月11日（東京外国語大学）

[雑誌論文]

今井昭夫「第8章 冷戦期の『熱戦』、ベトナム戦争」『アジア人物史 第12巻 アジアの世紀へ』集英社、ISBN978-4-08-157112-3、2024年。445～493ページ

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt_2013_oka1）。